青山御流

活花手引種

五

○艸木剪時手当囲方の事

○艸花類夏より秋迄ハ別而早朝に。花葉に露有内剪採可し。又夕方なとハ葉に及露帯る頃よし。日光昇り露乾て後剪取しハ花葉痛て久く保ず。木の類迚も同断也。尤無用の枝葉ハ直坐に除去て。逆に根本より清水を灌かけ。席に移す迄ハ風なく水気有土地。又板間杯に。水を鉢か盥桶杯に。根本を揃へ涼く活置べし。一旦水揚来らざる晝の間ハ。水気有冷る所へ。花を揃へ枕をあて。横へ置もよし。但秋葉青葉杯に。打し露を灌ぎ花葉乾ざる様にす。又むれざる様に薄く覆ひ置もよし。無而六七月の艸花ハ。晝中ハ風有節杯ハ。自花葉乾て。水揚兼る故

床に飾るハ。手前を。上へ出す如くして。冷しく生べし。是暑気
火気(くハき)煙(けふり)根の。濡くむれさる所へ用ゆべし　右二枝三枝の時ハ葉　手桶筒杯に清水を
明ハ花計へ移りて勇様に生ゆ活也ミ
時婦を水に落き殺へ移して添根ゟ保たり

○杜若。花菖蒲。あやめ。いちはつ。檜扇杯ハ。花瓶に生ル
同じ。姫絡高き土器に立る。活かへし。斜に横に生る時ハ。花首
曲り易し。花を背て咲也。よく撓く並て。細き竹椋の枝
を法。生なかるに。引きぬ紙にて。折葉出て、ゆるく結つけ。水
深く活生べし。是曲りて面白き節もあれども大概ハ悪
く癖付也。葉も一旦。水揚らバ添うして折く露をたてべし

○仙翁。椿子。がんぴ杯類。或杜若。花菖蒲。百合杯ハ。同じ
其法ハ花に、水を灌ぎ。飽べかし。須。若露を帯びハ。速に振り

掃ふ寄し。杜若杯。花に露あれバ。雨殺肉をぬ易く。せん
折りの形ハ。色損じ。百合ハ。葉杯。杯花に。ちみ。水仙ハ。花
重く。枝付しとなり。唯葉杯ハ。水を打べし。是また花を
活ほうハ　枝別用ハ。露ちなくて後。勇挟るべし　但都令ハ花　或るゆへ枝を採らし是ハ　花延ばし家の

○冬より初春杯花。梅桂水仙ハ勿論。其外木草ナれ。日
受雛窓の下。又ハ陽気迎く。暖なる所へ。囲べし。水凍る
に従ひ。花葉枝茎も凍て。水気通せざる故。痛ミ萎び易
し。殊に。枝葉も剛くなりて。採まハ折出たりし。室咲物
とら水仙杯ハ。別して悪し

○いづれ木瓜。石榴花。採ハとげ針をよく取捨べし。又

百合の開花ハ蘂をさみ捻て活べし。仙翁ハ折口。花
の莖ニ虫在之。桃の枝ニハ係毛虫の巣有り。何れも能
取去除。菊風蘭は子亦し。毛虫ハ子生長する者也。活花能く
洗ふ浴ぐ床ニ移べし

○夏の菊ハ。採と其係根を焦或熱湯に入。後葉水をして
床ニ移るなり。夜分朝夕ハ。水深く活也。宜の間ハ。古地。枝の
間採に。初の如く。手当して。移せ置べし。水打事も。能く繁
なれバ。葉むれ腐易。但秋迄も風強き音ハ。移りし置べし
右床に移せしも。如此すれバ保久し

○秋の菊ハ。採て直ぐ活置べし。能水を揚る也。されども
二岐三岐の。長き枝也。ふし繁き所ハ夏秋ハ草木共に

水揚がらけれバ其所を。能打ひしぐべし。又ハ折採。かきめ
を去。一本直ニ置バ能水を揚る也。但葉ハ水にひたさざるがよし

○夏宜中採に。遠方より取寄事あらバ。草木
共に。笹草枝類青葉採に。水を打かけ。夫より花葉を纏
其上を菰筵又桶の類にて。包み。白地に。日にあてざる様
に遂し置に。散ひらく屋し。其日向を指て。花のほど
あるかべ。直に水を灌べし。暫冷る所に熱氣をさ適
後。十分に遂水をして。又ハ其の前條をひさし。暫直置引活
直せ。撓らん直せ。其の活葉類弱に候て勘弁ふべし

○草花ハ採根肉にも。手に熱ふて水かれさき蓋ひ破し
ゆへに挿入れる間も。打し露を打べし。挿上手を引て後

焼てあげべし。探とどくば。又火にて花枝たる物は。糸に
て。麩糊塗べし。火は直るなり。木の類は。灰をかけても水
をあげるなり。尚皮目に挿法多し
○蔓物は。前夕に纏ひかゝみたる茎を。思ふ程にときたて
ち茎をつき出しさげ置べし。或前晩に剪たる。鍋弁。掛瓶桶に
根をひたして。水深くつく程に浸置よし。井戸泉水桶乃水氣
の消ざる上へさげ置ば。弥葉きかひてよし
○茎に竅有物は。何にても。花を先に水を後にきて。蓮河骨の
萎なびやすき物とい。性の何にも全体を短く剪て。水廣く深き瓶に。
惣長を過ぬもの。水中へ挿入て。花と出る葉は。多分作物の害
ひ覆ふ過ぎ有れば略之　但周葉も外何にても茎高く浅水にも供插別徳有

○萩は酒につけ後水に移すべし。竹の葉は塩水。梅種水。又酒
にても。一夜つけ置きて後用ゆべし。然ども是等は一時の浅きこと
なり。猶法方別法有之
○葉蘭ぎぼうしゆ芭蕉じんざう或芦。荻。蒲。芒。忘が。檜扇一とつ
の類葉先延び或萎て弱くは葉形よく目隙さる程に火にて節を
結ひ用ても宜し。卵養の害にはならぬべし
○宝国杯にて瓶水凍り易き所は。瓶中に硫黄一摘入
置べし。大抵は拒く事也なれども。宝の徳猫にはれば一概にのみ
ん得がたし　但取鹿の汁を卵加ゆれは不凍ともいへ是は清らかし
○水凍る時は竹花入勿論。磁物杯も割け損る者也中に水指
の。銅筒を入置べし。竹の筒は当月より二月迄は見合為べし　是非用人も

なりたる事ハ。油に水を捨て。涼く仕舞べし。室へ入置て
裂ざる掛物なり

○花を育るに水ハ。日〻新に遣し。別て夏秋の頃ハ。時〻に多く遣すべし
水古けれハ。茎葉くされやすく。花葉ひ早し　但水ハ雨流をうけ上へ

○室咲仕様冬の事

○梅ハ冬とても室咲。深山に生せる者にても。花にとめども。遣去る
園枝ハ。其時花の形まてを咲ざれハ。花に乏し。故に自分室を
求て咲せ用べし。但室咲の類。室之梅・椿・辛夷・桃・連翹・杯は外
何にても十月頃より三月迄の花ハ。皆物とも大方室にて咲之
則仕様ハ。大抵蕾の顕れ見ゆる。根よき枝を撰み。扨て不用な
る無き枝ハ。除去り挿可き根に掛へ小枝を。捨に掛よせ

藁にて結ひ束べし。少く枝折たり損じても。苦からず。洗ひ水の流る
ざる桧に。暖なる所を。あけ枝も水あげさせて。後室の麹の
室へ挿竹筒にても。枝物なる水につけ。昼夜二三日。或ハ七
日ほど。花の咲を遅之。乾糀の多き室様より暖之。又麹室なきハ
土室穴蔵の内へ。風爐に火をいけ置。釜をかけ。湯気を室の内へ
籠らせてもよし。但火氣の無に湯きさる様に。釜と。風爐との間を
紙にて張ふさぎ。湯氣斗を出すべし。又大なる箱の外を。藁こも
杯にて包とも室内に小風爐。釜を置。箱相應に。湯気を出し。
常に置ても。たき置もよし。但火氣の洩れさる様に有べし　何れも
様子見て。當分を手に有べし

右出方保様の薫増九分一を出此外秘事口傳多し略之

花溜 手桶

花手桶ハ如図水入深く上下節り太細竹之柄に椿ハ底も手桶ハ下細るてさげるし

花溜 瓶

瓶も深く口の少し広がりたるよし口廣ハ花こけて悪し

蝸牛足 竹筒

花鋏

鋏ハ如此輪癖に巧みなるがよし 指出し入りやすくされハ悪しき物

如此撓せ掛りたるハ悪しき也

小刀

小刀の柄ハ握りて少し錆るがよし 大なる鞘ハ力入難し

鋸

鋸ハ目の細かなるハ枕粉つまりて悪し

鉈

なたハ如此なる形よし

削臺

削臺ハ角なく口堅木の凸たる重き物よし

○柳乃事 附異形同様の種
○枇杷柏朴の事
○躑躅花のこと
○擬宝珠のこと 附異形同根の種
○大小萱の事
○山吹捻掛のこと 附変形同根の種
○芍薬の事 附変形同様の種
○花菖蒲のこと
○燕子花の事 附変形同様の種
○櫻三趣のこと
○牡丹三等のこと
以上十五箇條首の巻
○菊花事 附異形同様の種
○紫苑の事 附変形同様の種
○檜扇のこと 附変形同様の種
○梅燦の事
○南天のこと
○蔓草右旋左旋のこと
○萩の事 附変形同様の種
○芦の事 附変形同様の種

○蘭乃事 附変形同様の種
○竹乃事
○女郎花のこと
○川骨のこと
○蓮九品のこと
○紅葉乃こと
○水仙のこと
○艸木水揚のこと
○季月配當巻寅のこと
以上十五箇條尾の巻
○口傳譜箇条同綴
○松竹梅の事
○萬年青の事
○出生見分の事
○大小應分の事
○色艶不言のこと
○三才長短左右定規の事
○加持祈祷の花形事
○添除順逆的の事

○婚姻真の式飾花の事
○真の飾三具足の事
○釜[illegible]鋪板長短の事
○竹笠墨染十三等の事
○花器高低寸尺の事
○釣瓶上下寸尺の事
○薄板方圓厚薄寸尺の事

以上十五ヶ條口傳謹綴

○別に鑑鑒此一軸有ヶ条家に不絶

右箇條目録の巻くハ稽古の原に随ひ親しくに
惑しくハ以男を以ま傳ふるも此あり

○活花授説問對

○或時生友。永寿と云へる人。来て云。我多年活巻に志
有て。学びむる事を欲すれども。兎角。世業にいとまなく。唯流
に思ふのミ。然ども空しくやまむも本意なくねぞ。此頃長
按に友として。瓶花の書。一両冊をも求め見て。窺へども。唐に
書ハ。傳説のみにて。巻形是有物ハ。見当らず。亦倭集
まれ図も多くあれど。流義への秘する事にて。ミな所変り。傳説
にも區くにて。不審のミなり。何れか是。何れか非なるや。
貴て。其趣向も学べば。我輩けるなりむ。願ハ告玉へかし

答　唐の事ハ。いざ知らず。此御國の巻ハ。師の傳へ有ことと
なれバ。何れも。授るべし。人の是非を論ずるハ。亦ひとつ

しより。術紀学も備りき。世の変化にさへられ。自ずから
わくれて。読ふ人も稀に。我が家のかきりを伝ふる迄にて
空しく秘めて。他にわたることなし。然りしも又花徳頌
なりしぞかし。殊に室町御前までて。賓客折講の設に書
院荘厳の具となし。又ひしより。粗き道もあり。或ハ古伝を具
し。或ハ流を汲てより。尚将世太平の恩沢に随ひ。京家
門をわかち。其事沙汰に用ひ。婚姻吉賀の式より。朝会相語
の席に至迄。貴賤都鄙遠近となく。活花とて饗応の
一助となりし流に風俗となりて。用ゆる事広ければ。其法
も伺しからぬ物にて。僅の隔ても。実に秘する所かは彼所
に顕し。彼所に秘するも爰に顕す。其源ハ一なれども

流ハ損く変りて。種々の声ハ伊勢に。濱荻とよふの類。各
所につれて名の変ることく。みな同前の常なる。未熟なる物の
大なるハ。書とも伝ふとも。まして術にいたりては。書ハ不尽言
言ハ不尽意とて。中々筆をもて述かたきを。唯わつかに人の移
に対して。其意味を告るのミ。是ハ何事とても。同しことし。則
寂をはし伝ふといふなれ。其故ハ。袁宏道の瓶史に。不可太
繁。不可痩と。其制禁。又風にてハ。実ゆれども。繁痩の中
庸なる所ハ。容易に知らず。敵て其道を飾るも
かならずしも。秘事口伝とせすや。微積て其場に至らば
手ずから。学ぶべき。既に聖人の。教にも。吾無隠乎爾
と曰へども。其人の器量と。執行の位に応ず。説得くまひ

て。爰に民可使由之不可使知之とのたまふ。釈尊も衆生に
ハ。極楽十万億土と説たまひて。又。爰に此不遠とものたまふ
是仏の方便にして。以伝而授以心伝心の旨なり。吾仏国
の教も神代の昔より。神告神懐に有り。皆是神秘に伝
ふあるハやゝ寓言に書出べきものなり

○花葉折採の雑附 志存発端の事

○問云。或人草木飢草ハ勿論雑木雑草と云ども。其花
実あるハ。玉ハ別に食に備へ飢を助け。指茎折木なれば。炊
爨の用となさゞるハなし。然に近来。活花流行し。民用薬
木の差別もなく。悉に剪取。又ハ薬木毒草なりとも厭なく
椿桜実果を集め。花香色形ゆゑに益に折捨

の妙いかゞなる枝の有てや。未ダ得ざるといふそれより。先ず
趣ハいかゞきくまほしや

答。他ハしらず。我ハ一己を慰めんとせずして。奇木異草
を求め。花香色にめでて。或ハ枝捻を折。生葉を飾。強に形
容を作りなして。神仏に捧げ。賓客に対し是を風流
と心得我が癖をとりてよしとせず。従ハ労せ。人に施さん
や。儒家本草の説も同に病を。直に得る。其実花を
知ん。求めずして。能毒を辨に在。枝葉に随。用仲となせ
しより。自ら常盤木とては草の形。嫩葉蘗生。括枝
折葉に至る迄。是しの眺を得く。古なき里も経に。此ぞ之
あるべくを覚へ。四時造化の移り変りを友として。其

操を觀ふれなり。既に聖人も詩を学ばゞ。艸木の名を識と
説玉へり。且椰艸木山野に萌ゑ出るとも。雨露の潤育を
得されバ。甚生ずる事かなく。危も飢ゑに緩といへども。
水のうるひを離れてよく。齢を保ことあたはず。然ハ萬象ハ
艸木の父母。水ハ艱士の君様なり。扨く好ミ楽む所より
して。手傳ひを走り彼を忘。是を服理と推し義を察し
て。父母の大恩を顧り見。君上の恵み重きことを辨へよ。然
時ハ忠孝の導も是より興らむ。所ニ一樹ヲ不ハ以テ其時ヲ非ス孝ニ
と孔子も説せ玉へり。故に樹を断ち。葉を摘ことも其功
あらバ時とすべし。枝を折をも萬て鬼神に捧げ。祖廟に
そなへて。宗廟を興し。かくとひをなさバ。追善の端と云べし

君親に薦て其意を慰め。老幼に迄へく其用を務め
ハ。忠孝を家の端とす。稔を伸く葉を採て。邪正ある
失の始末を顧て其身を諭ハ。数多いろ〳〵なれど。既に佛の言ハ
古来作の法あり。又此神國にハ。一年の始を祝し。松と竹
との操を立て。常盤木を折添く。其ときを祝し名
和睦の禮義を顕。然ハ物として数にあらさるなく
て忠孝の道離ることあらねバ。形として禮義を備く
さるはあるし。人ともあとを親とする志を家にせバ。鱗槽の流に
根を断。菊虎の悲愁に。其萼を実にの新なん。孟子曰教
人以善謂之忠。宜なるかな。爰に當流の中祖　希尹國
公。古語を引玉ひて。人心人面の柔なるかし。昔承し

般変方亦然り枕中。孟倍小人の常として世業に居
ては利欲にかゝはりて風雅をよそにして名聞に奔る。随ひ
大道に小技に拘りし。不求ず得に随ひ。勧善懲悪の歴
とかく論ずるハ聖佛の法。國津神の来往ありて我らに
親しむ者ハ三五の教訓を附属す。ねむごろに学びて
是を悟りてハ業てう其徳なりとす。聊ぞ小技として捨るを
易曰善不積不足以成名悪不積不足以滅身 釋經曰
漸漸積功徳皆成佛道とかや。然に小人凡夫ハ小善を
以て益なしとして為ずハ。殆悪を積に迷ひて身を傷へ玉ふ
実にさることの於るべからん。然に於いて不拘く大小に為す。
憲法の御を守ず準縄の次第を見て道をたつる事。

天の物に配して命ずる所之孟子謂教亦多術矣とハ
外ならじ譬ハ聖人の言葉を消しきたりとも。行ハざれバ
則小人。佛の経論を身に肩ふとりとも迷へる時ハ凡夫
なり。能ずとても世語に於て稱して身に用されバ。法に
峯の白雲を眺むるに均し。纖細なる事も道を行て
積バ。大教の「滴雷穿石綆断幹」といふ漸麁の功有り。或
人の歌に「おこなひはちりもつもりて山となる」ともいひし此歩
みよしをよく覚え是非の道を味へて辨ふべきことなり
大小ともにさき成の體なれば積を用とするなり
○神佛供養の無附信和に擬事
○同志 ハいかなる徳によりて神佛に手向供養の冨上

等事ふ以あらざるや。從て茲に學ぶの藝術とちへども。時ありて耕
鄙詩歌となれども。事ひに勸善の道に從り。勿論無益にあらず
夫く小式を加へ。童蒙兒女子の好む處ふ從ふ。諭さとして
其のみてましきれハ信有。信まれハ勉す。まてむる所ふ無く
て。從ひ等ハ。争て之を強まてらしむ。古語に従縁入者ハ長不
退失とあるく。學へ無凝枝從の由来。一文字画の堅人ふあらず。
挑事言はんすしてらく。人をかへり見さしむるの德ふ表し。和
せられ。自気に對し席に爲して。膝を折り脊を屈し勢を
和らげは。威儀をも続り。聊揖譲の端をも興す基くして。
終ふハ風俗敦厚の傍りともなりなん。禮曰安上治民莫
善於禮と。其禮何の爲ぞ。禮ハ序を分て尊卑を正し。

和して亂ざるの法なく故也。故ふ擬諸其形容象其物
宜といふ易の道を示つゝ。草木の長短屈伸諸大小
ふ名して。其位に配し。禮法に表し。和を勧めし。其持は
敬己を示し主ひく己を屈し人に應じ安とられた。
枝葉無出生を擬ゑ言を記し。細さハ自大きふなりひ。
續さハたたみくよんきを逆へ。ひめ法ハ伸ひて直まり
通ハ緊きハ有ごい。疎しきハ補ひ。精粗本末の次第をあきさへ
屈信相感而利生焉と。易の教ゆめしなりしハ。禮讓謙退の
趣を屈伸ふ備し。常ふ謙復の分ちをも。其經に擬へ諭さば
序なくみしく其ふつへ。若ふ進みの端なしむ不尊以遠不責
民之所不為とい。君子の教へ亦。隨其所堪而為說法皆

令歓喜とハ佛の導なり。合して能く味ハゞ千益なき事
あらん歟。此等閑に心得給ふべからず
○非情とハ有情を正し除く附　三教五倫万端の事
○問云艸木ハ非情なるよしにて。惟性相生ずとも実
枝葉。肥痩盛衰の節をたがへず。然れども又一類に来てハ
三教五倫の道を勧めん。心も動し情を謂ふに理ハいかなる
所に候ふや
答　三教五倫の旨。名と経ハ異れども。理ハ一致にして道
の體用之。其道とハいへる物ハ天地にみちて。至らざる所なけ
れバ。亦備へざる物なし。中庸曰。道也者不可須臾離也。可
離非道也。爰といふ大道まてるべし。其大道ハ天道にして出に

至佛の教ゆる所。列萬物常に顕はる法也。故に小枝の
挿むといへども。三の教を以て。せざる事なく。五つの典に
あずからずと云事なし。既に孔子ハ貴下賤無不得
と説玉ふ。佛ハ済世之道於一切萬物而随意自在とハ示
されたり。是万物一致なる故に。自在也。借又艸木ハ
無心。更無心非情の物ハ。形をもて心と為るなり。枝の垂
も蕾の。道理へるも。手折に形なけれ。人ハ生と変化
ども。春ハ芽を生し自ら事を示け。秋ハ落葉を作ひ閉
蔵るの心、徒ハ小なれども。如何なる人情。并落に連る
ぞされバこそ。釈経に艸木国土悉皆成佛と説れ。又易
ニハ観其所恒而天地萬物之情可見矣と有。孟子ど萬

物皆備我矣と説けり。然る時ハ萬様一辨なる事明らけし。剣形と五倫に比されバ。縦横曲直大小として。君臣父子夫婦長幼の序に喩へ。参差たる連枝とし。兄弟朋友の信に擬く。以一瓶の麁を本とす。又曰方ハ以類聚物ハ以群分吉凶生矣家と云集會ける物ハ。必貴賤長幼有ごく以。上下尊卑を分つ。剣斜正ハ常る平の常る曲直ハ君子小人。善悪に夫備あるの形之。故に心ハ瓶中の主となしく。君臣に喩へ陽を宮とる。陰く圓なるハ將に臣に剣とるの形なり。戴ハ妻臣に体とり陰に表し。右枝を貧ひのせしく。方なるをとて地形に順ふ。相ハ五行を兼帯び陰陽の媒として中出三偏の盈缺を資け補ふ。先其

に花。中央の冠として左右に捨となる。一体の色に及を正し。在前忽馬左後といふ。顔子の言葉記しく悟も心の五臓有應るに似たり剣瓶裏の三枝ハ三才三綱の模範となる也。必一瓶に活すれハ禮儀尊卑と昔とし。孝悌忠信の道を慈て右に座き事也。尚神儒釈の道を剣とる底を傳みしなごく。強ひて白地に述べれバ貴きを以賎きを飾り類を之。然ば従に所しく物にあるへされハ其理あらしゆべ。凡陰に小人の常なり。古人云る有玉卮無當雖寶非用又曰依法不依人不依法ニ依法不依人文是なる合。能く味ふて知へきなり

○真行草の辨 附 荘容培蔵の事

○同云花形に真行草の品有流もあり。或ハ花なきこと

又、或人の傳に。草木の姿千変万化にして。其躰極るべ
からず。其極まる所が。造化の妙容にして活花の本躰なりと
て、枝葉ハ勿論。形をゐかにも。名もなく。求他に厭なる人なり。十文
字掛と云へるも。皆出生なれバ。強て去り嫌ふ座き事に
あらず。ゆへに真行草との形を。取極る時ハ。強て折曲げ。出生を
害ふとて。更に人作を加へざる流有り。是等ハ如何に侍るや
答 無きと法。有も法。皆一事にして。其もの趣有るし。夫
其実ハ物の始め。有ハ物の末る所。極来て名なくんバ。何を以
て擬を礼し。其道の枝折とせんや。抑名ハ実の賓にして
形の標なり。例真行草の三躰ハ自然の姿。九躰も変化を
なす。例ば出生を離れて。求めたる物にあらざれバ。皆其々其を仮。

曲直を顕す。初中後の三躰を。猶的のごとく見奉月日の行の
名をかりて分りがたし。然もと是三等にて天地人形の鼎の足
覆ざる物ハ。三足に像るなり。変に於て其数の数と云之。
取ふ一瓶の内にと。又仁戴桐の名を立。三枝を備へ設る
東坡曰真如生行如行草如走是本の意
葉をもつ。変化の理をうつし。さて草木の姿千変万化なれバ。活花の
本形を極むるべからず。其極めざる所が。造化の妙容にして。活花の
本躰。又いふ十文字にも。出生なれバ。強く厭ふべからずと云
や。たとへば出生を痛へ。常にして其儘植物にし。或山野に閑居て
所々ありて。眺むべきなり。想ひ御覧ても然ども。性に背と
覚えしなり。横に出る枝とも竪に出る。竪なる枝とも

挿べきし入也。塩湯責雲とも考へ候。唯水に育ちて。枯
萎せざれバ。出生なりとも用ゆるにや。夫木ハ含く。文質野俗
の教ハ。人行を守己一縣に。使くとらし者也。凡物ありて能あり
能有て用足ざるハ。猫ハ猫にして鼠をとらず。犬にして賊
を吼ざるハ。無益の具也。左様なる獣ハ飼にたらず也。
古人も戒め置しと也。何事も推斗べし。亦自然とたくみと
す所ハ活花の體。人情を以人事に逆る所が。術を用之。世に
心有て。活花を翫ふ人。何まで出生を悪むべき。然共第の
事。見よき形の物ハ。出生ぢに用ゆも見よく。悪き物ハ誰が用ゆも
見ぐるしく。是十目の視る所十手の指所にして天眼と云
也。善と云悪と云ハ夜の境自ら彰れ。取舎の分ち明之

用ざれ。古語に木実盛則披ㇾ枝害ㇾ心と識るべし哉此言葉。今
目前に樹木高くして。梢大なる時ハ。獨り其枝を覆す。枝
條秀て長き時ハ。其幹を裂く。艸草強て延れバ。茎自ら
折け。枝葉繁茂なれハ。殆ど蒸て枯るる也。甚高く繁し枝葉瘦たる
所ハ。皆天為に従ふ所なり。夫まで又陰陽を避れハ必然
也。況や根を断ち瓶上に插ては。偏に於いては。増減の度量
なくんばあるべからず。是一瓶の姿にして。ある所にて。たとへば伸
上下経童にハ。皆自然によるもの也。大凡天性艸木の容。枝葉東
にくるれバ。梢必西に昇り。或南に偃ハ。忽然ら北に勢ひ。縦横
斜正さる陰害ハ。左流右顧前俯後仰。直に造化の趣断
のなし。爰を以法ハ自然に則り。形ハ出生に準とも。既に天

地の廣大なる。人情のほりあるさまを。詩に奇ならば僅に六
義を辨ふに觸れなば、未餘りあることを聞らず。萬物をゆく
艸木の形にひらくべしハ、手てらし義や六辨に属へらるも。是
皆其方角を設る大綱なり。師曠之聰も不以六律不能正
五音と云孟子の語へ本ぞらゑ。其理を明む處し

○曲直凝滞の無作　稽古心得の事

○聞く人の手ハ直りやすき物にて。直きを好めハ直く。曲るを
取れバ。曲りてゆくものなり。必凝滞むべからず。癖つく者なり
故に活形を以てせよ。枝葉よりも直なるまよくゆくべからず。屈ミ
まするを伸す。伸ひるハ屈あぶるがあらはへきらむ。竹がれ・松
蓮根の直なる物ハ。其豊にしくをきまする似ぞれや

答　ほにても人情ハ偏りやはらき物にて。朱に交れハ赤けに
なり。善悪友によるべし。人の心の邪正ハ行ひに顕され。
気の強弱ハ形に出づ。思ひ内にあれバ色外にあらはるゝ
と。古き言葉にも見ヘたり。然ハ一時一興の為といへども
又能為るべきらは。其なりの形に連て。人情の
偏より癖つくと形るぞ。手けづり失迄る術の。心に偏りて
行に出べし。准らへ弓を割る處き。失是深くも含まる。己が心
にあるべく彼にある次。唯其の強弱による者なり。亦其形も
大小厚薄曲直多少ともに。各理ありて之。曲れるハ勿論
直形るも。強りに真直なるべき。外の枝深ひらぬれバ。亦曲
過るも怕し。実に。水至清即無魚。人至察則無徒。狂而直

之こそ。聖人の旨にして。一事萬物の則なり。直ことを
其狂有事を察して。今詩に都鄙。活きを䛕ふ人多
けれども。獨間孤寂の友とし。樂者なく邪く。唯人に迎へ
兄弟んことを専らとする流多く。其所にして。詠よまぬ人く
の。猥にためてをいうじくる得兩目として。いよく其言葉を
先なまとし。般外実邪なる法を事とし。殆本意を
失ふ者鮮なからず。是等の人くの心ハ。曲直の道に不弁
あらば。太他にっ閉むことのみを索る。俗情の主とする
より興まり。今名聞も。其名をあげむの一方なれ
ども。折く其跡を顧ざれバ。僻に流れて。実意を忘
者と大小学するをなく。詞を兵へされど。其道の奴と細りて。

人の笑ひを受るとなり。能く考ふべし。彼蚌蟇の
曲直ハ造化の自然。竹の直形るも竹の苦にもあらじ次
梅の曲れるも梅の悪にハあらじ次。其外山岸沼池の。閑
木散艸といへども。皆時く節く於枝に随ひ。出生を見と
是を浅くとし。深に分じてさし入ハ。夫くの姿ありて却て深し
も不深なるべし。枝あくまびられることなき。蓮の直なるも是
せし人ハ。君子にして。茎よりは。枝く生ずる葉を親しくつりなさ
小人は去られなし。老子も曲則直。枉則全と説玉へども
曲直ハ陰陽始来。其のよく居て物を形り。伸く縦載る
於道とぞ。考る應し

○籠中種品修作の辨 附 長短詩歌の事

○問云花ハ一瓶に幾種。幾本にかぎるべきや。瓶史瓶花譜
等の唐書に傳ふるハ二種三種に過ざるよし。或ハ一本にても
亦二本なれバ。麻雑とも傳定するも有り。或ハ獨秋花
ハ論なきもあれバ是にハ數の極なきにも拘るべし。何種にても
唯繁(すき)はしく入て宜しきや

答
いかにも二種三種に過ざる事也。大要史等に極まる。
倭漢共に違ハざるべし。去ながら其性状の全くば。移さんと
せバ。むしろ一種にかぎるべし。上下陰陽左右屈伸に随ひ。花
葉相對して。生立自(おのづか)ら叶ふべし。又二種三種とても麻
緑葉林花束縛するとも悪し。亦一根にても一瓶を調ふべし。
何までも二三枝合して其褌をなすべし。或ハ揃ふて下
揃はざる物。或ハ花有て葉なき物などハ。別種を加(くは)へて補ふ
べし。但瓶中に用ゆる數ハ大旨屈曲ありて太き物ハ二根
三根にして少なかるべし。或ハ直枝にして細く柔従なるハ。五本
七本も。枝葉繁りの甚しき物ハ。形備はらず止むべし。猶
又其陰陽補ひ様に至りてハ。麻と器とに随ひ。各器の
其形状に適ひ。三種も五種も時宜に任すべし。花を主とすの上
に有べし。猶又瓶花譜に揭秋花ハ論なしとて。深く極み
も是非なきや。夫ハ其國と人の心に任すべし。ざんしんめ
に秋の野のごとく千種(くさ)咲交ゆれバ。席上に移して賓客(ひんかく)を
對するに。争(いかで)か嫌ふべき事有らず。今秋花に限り論なき
殊(ここ)にも一種なくとも両便。且作するとも。云ふにもあらざれバ。強に

丈ホの説を捜出さるべし。今當流に傳ふ所ハ。先尾ハ芝
に桔梗にしをる也。或ハ萩に女郎花。亦ハかるかや
小車の類を初めとし。皆ミして出所相違あれバ。二種
三種いく五種揃も。取状繁雜なしさる様に擬ひ。夫く
の趣を能はへし。則瓶花の本意と云べし。那そ篠簇なと
として事たるん。彼唐詩の数行。我國の万葉集の長哥
のぬき。天地山川四時人情。ひとつとして述さる所なく。一
句一字も儀に叶さるハなけれども。其事繁長にして
意味深く。一言に寫しきかたし。都而俳事にハ。五七言
の。絶句。三十一文字あり。唯ひ簡きに似たれ共。其道堪能
達人の。よみつくさゞるに況ふ初て浅學未熟の上に

をいく。及はさるども。玉まさるに比くらぶるべ。茶と道の
仇にして。必其神の意ゟにせ侍べ

○同流花称の解附本末傳説の事

○同当世に流布なる活花ハ。多分茶家の餘流なり。然
れども彼ハ句縁活式にもなく。甚茶道とハ拘しらず。右に
も未とを汲者。猥にして本末虚実を争ひ。甚しきハ
奇怪遺恨を挟む流も有。是ホハ如何ふ侍るや
茶花他ハ未だ及ばれし。同流同流と云ふ。未だ古さ
香水上達けれハ。幽名世に實なるも有。或ハ始祖の傳へを
失ひ。猥く私説を設け。古傳と名つくる族。其名一句く
様美なるも有。或ハ形状美なるつくし式法拘し心も有

其名を續者。流末になりて。實ハ其時〻先達の
高才雅俗。功者不功者ありて。色〻の手癖有て我かちなし
易き姿のまゝを。常として人に傳る故。次第に其轉〻く
一派せさるなし。何事も時勢の癖に流れて。其本を
失ひ。後ハ支離ひたる者。無論正さるまし。呵ま不甲乙
を有へし。然共。猶者をいたゞく人を無ければ。仇を結の端となり。
哉も他の未熟か我か不調法にハなるへし。我か解ぬ
我か德。人の尊はなれば。根に滞ることあれ。己か詞さ侍
事抔ハ尚以也。唯手前にて逸失の薄手を顧に心掛。師祖
先達の法を續へし。今都鄙にある此技を嗜て事の
至り深なる所より。先達にたることの數多出来て中には浩

葉の為にし。或は名の聞えを求めむとして。初心未熟の
獻なく。秘事を授け口傳を常として。猥りにむさぼるも
となりぬ。其傳授の古格ハもとより然れとも。右の拙き人に
よりて先達ハ。師を補せらるゝの法猶なく。学者ハ價ある。
秘事を。買ずして得。仮令生涯にこの道を
失ひ其所よりして。適ゝ一傳を得れハ。萬衣に通達
しまゝもとに。経迹に倚しなに人心に違ハ随り。誰より傳へて
已にまた。先生に補せられんことを欲し。是に徒を集て
名聞を専に自負を事として。或は利欲にはしりて人を
悼ることなし。是ハ其事をなし得られたとて。一旦の
虚名にして。却る其道の實意を失ひ。恥をひ呼せる

者也。抑師ハ範として人を教ゆるに。道を以てするゆゑ稱号
なり。職ともに先達師と呼ぶ。字義に二ッあり。凡ハ遊
を恥ぢ隠しむべき事也。凡大小善悪となく諸藝
技の常として。秘事口傳と云事有。其者の熟不熟に随
ひ。技術の位に應じ授る事なるべし。然るを初心
未熟の厭なし。口授秘傳是を先に與へ人とせる
者あり。大方ハ我が藝の未熟なる所より教る業浅く先
達の器にあらざるを人知り。用ひなしと恐れ。或は
同志なる人にも是を秘きとを目の儘り。捨去らず事をもたげ
亦ま利欲に媚び諂ひ其人をとり。其人を損き止めん
爲に。なす者なるや。夫等の先達ハ必初心未熟のともがら

詭慢不実を勤め。児輩童蒙を誑惑し異事悪事を導く
べし。歎かはしき作業也。抑活花の類ひも。風流の一事なれバ。
必作者一有。花瓶器物等も。深切あることを。忘るべからず。
尚茶室の花ハ古人より。連綿として其趣有り。夫々の門
に入て学ぶべし。今書記せる花の其所の花にてハ。唯其流の
花のみ。似る者ならんや。其趣意ハ其源を尋ねて問ふべし

○實物常盤葉を用ゆる事 附 縫寄の事

○問云或流の傳に。花散て實となりし物と。花なき常
磐葉の類ハ。活花の貴嫌なしとて用ひず。亦用ゆる者ハ。
必花無物と交ゆ。別て剪り株枝に物様ハ。嫌ひ用ひざ
るなり。是等ハ如何なる事にや

答　夫花ハ其門の掟あれバ。其流にして八兎も角もなるべし。
敢て作字與る事にハあらじ。其形ハ其志にあるべき也。
秋の錦山乃もみぢ葉。江系の青柳。岩磐萌ふの芽ぐみ出
生もる若草の姿ハ。優しとあるべきも殊更。筆で写すを
めでたき人。亦風土につきて各とほしく瓶裏突くむより
ハ。ざれる枝。ひねびたる梢を見るゝ。夫々の容ふ任せ眺むれバ。
孤寂養意の一友なるべし。唯祝ふべきハ。穀実菓瓜の類
のこと。其外事に随ひ機に応じ。毎悪禁忌の品ハ。別に一箇
の伝あり。年寒うして松柏ハ凋まざる。君子も其徳を
養めたまひて人を親しめたまふ。尚雪の下にもとい。万年青や
地木の類ハ。青葉紅実の操正しく。其色を保てり。何として

此類の者をぞ賞美せざる故。古哥に「なりみどり常盤の松の
陰に知くらるゝ川ぞふかき色をからにさかりを見る「あら見よ」な
も折ぞ青柳の糸てみだれてけふもふかしつゝ是皆当季に
かなひたるなるべしや。又「雪にうれハ春こそもりせる草もあるを
裏に志つれ枝も咲たる萌ゆるき梢とや雪のうちまでも裏
を思ひ。色なき枝葉も容ふよりてハ。恭をとくある風情あるを
物ごと窺ふる所より備はりむるを。思ひあつむれバ。尚余情
ありて事を志るべし。兼好が徒然草ニ。花ハ盛りに。月ハ
隈なきをのミ見る物かハ。咲ぬべき程の梢。散り萎れ
たる庭などこそ見所多けれ。花実の風情なきを。
千里の外までながむるよりも。咲ちりなりて結出るなど。

いと心なきさて有也をハ所のこと。目立て見る物ハ是ハ家を
立させても。月の影ハ家能かなしくも思へることそいふめり
もしう柱しれと。昔ハ立ハ草なるをこと。唯賓客招請の
折ふしこそ。求て出すき器を入だ。主の心にハ深くして。饗應
故設け薄きなれ作手り。是ホの節ふ是ハ又格別ふ得し有之へ

○瞽古虚實の弁 附 殺活得失の事

○問云 或人活出ハ立花と違ひ挿入とて手軽き事一なり
故別ふ習ひも是なく。唯時々の木草の風体ふ随ひ面白く
の気象ふ随て任を入へし。自然ふ面白き姿出来る者なり。今ハ
昔に違ひ。其形巧ふなり。花瓶尚撰て急しく花あやまる如へ。
必器物を害ふこと有。されハ唐の活花ふハ。瓶内物を設け活
出と見へたり。然る每事の強者。自己の作意を専とし。臆説
を構へ。枝葉を折曲け種々ふ責めなやます。無益ふ候ふと費て
花ハ労せしめなり。活ふ折撓て捨るのこと。斯ては活花と
心にて。殺と云へし。唯花ハ一時の興。心を労さに目を歴
気。情を育の外他なし。古ノ陶淵明周茂叔の人ハ花ハ。直
此なく任ホみて自然の姿を賞せられしや。是ハ其生質を
愛せしと云者なり。今も尚是非の趣を則と出居と語くれ。さ
るべきことならや

答 いう事も近年の出ハ流行ふ長し。夫々の説ひとなれハ。自ら先
達の書を。置並る様多く出来て。事の義理なと紛らハ。
物の除ふをもなる次。偏曲変体ふ走る故。言葉を巧ふし人を欺く。

修年若き人〻婦女杯ハ。師と号して経迷が体しく云ハ
さとぢ貴て。其者の行迹好悪をも察せず。なにに化され流に
誘引れて。其門に入まゝ其体の我儘悪言を。實と心得。忽ち
其口舌になれて。人を弄し他を譏り。すてハ新しき人をも枕に
趣ふ事さへあるぬ。総して悪業夷蒙の常として。己が足あれ
閑ふまゝすぐる事ハ。理非善悪の分ちもなく。我か流の外ハ一概に
悪しと心得る者有り。諺に九足の猗猿が。一足の真猿の我に似さ
るをそしる。却而かるハなりとして。まかしら云の類なり。是一犬虚を
吠れバ。千犬實を吼ゆるとのたとへ。すべて初心未熟なる事ハ
先学ハ深学の手引なり。初び学びの事ハ其本〻弁を知ずハ
親〻事形なる様なれども。是と心得先が上に尚悪き所ハ欠覚

易く。其覚へ安る修に。又人家拵られ何事も先入が師となす
れバ。尤ホ宗に心得ぬして。其道〻の實意を学ぶべし。一旦我か
學に徹しぬる事ハ。必独り出凡の功有也。望くハいろはの文字
を習ひ覚へたる人も。其仮名字を以而用されハ夫丈の
用調へり。然と名聞のことも宜し。未熟せざる者名字を知ず
調へむとせバ。其用無なる事易からず。何事も其場に至りて
して其下手なきを知らずして功なきなり。果ハ根をも屈
く拵る而をなし返。却而其道を譏る者も。故に大小となく
我が力に学る所が肝要なり。実を心得るべきなり
家業諸芸者の癖。故もなくきハ過失。然る中に於ハ忠孝の道と
職業。然るハ天命と心得。学ぶべき聖人の道。其教を

得されハ智も亦精しくなれバ業の義理深く。毫厘の違ひより千里の過ハなきなれ。實子師吾物綴くる針のごとし。貫子ハ随へる事のごとしとや。鎖細なる事も。学ひ人とせざれ。能く其先達を撰むべきなり。先賢の戒なり。偖文法をハ擲入まるへバ手線に挿なほり能くして。忘棄に向くの時の考へ今秋もなく。又規矩準縄も形く。自己の思ひ入なれバ賢子菊摘。忽ち瓶に移りと。而作を以るを以つ争家功者もなきや。夫れハ唯家勝枝縦と云ふ者にて。全争家功者の謗りあるべし。むたしても論べきなれども。堂上の飾などして賓客招請の設にハ。諜罟不敬と云ふべし。斯てハ諸花を出ふ名而已にて。たゞ瞻眠を覚ぬし。或ハ此業を慰る

の然何の益なき戯となり。前にいふ如く物有れハ用有。用有れハ必功あり。俗にのみ見捨んもむざんと云へし。君子釣而不綱弋不射宿と。何見ともなけれども殺生ハ遁まじ。然れども少にても悪を退け。善に進むことをなくまふを以てなるべし。物棄なくして労なれこそあらぬれば。勇むことに労を厭ふ者も稀也。然ハ聊にても労あると形かハ。益ある学ことならぬ煞じて粗末なるにも理の全まらぬなり。必廉恥に比ぶ俗に。性ハ道によつて賢しこく。秘事ハ睫とて。家々得せざる道なるに人を諭し。家々才をも顧ざる者也。古え唐の輪扁か車を作る味ひを以。齊の桓公か天下を治る聖経を論し其意を述ぶ。是等の事を推して知るべし。世に筆を握て物記

術なき人とく日用の概紛みして。生涯稽古なき術なれバ。何
まても未熟ハなかるべき事なり。我手をなれざる物ハ。又思ふまゝハ
取得難きものなるべし 古語に良工者使ニ手習一知ニ其器一而器
亦習知ニ其手ヲ一とハ宜なる哉。譬へ上智の人といへども。稽し
なれざる事ハ容易ハ出来がたき事。増而や夫より下ざまに
至りてハ猶更なるべし。既に稽古事学とハいへど世。好されバ得る事
あらざる故好くとき学びされバおのづ知る事となし 何事
も念入て其甲斐あらバ。いかに物を惜むべき故。慄みて慝し
其節ハ何程も急で厭しき其の事功者になれるなれバ緩急
遅速ハ心の侭なり。又其上手を厭ふ人ハ有偏しられども。
或ハ性質の強弱によりの。或ハ其事に限り。好嫌勉怠の

違ひて上手と下手と分る事。脊を合て東西に行が如し 故に聊
の技違も得ざるを以得たると思ひバ。眼能百里の外を察れども。
我が眉毛の厚薄を見る事あたハざれ。路次の遠近ハ行て後語べし。
其場をふまざれバ其事を極るハ過也。何様氣象我勝を先達
と欲る故。彼囲曲ある枝葉を書院の大床に器相應に見分。數様
と東ね宗枝を集。夫々の風躰となればこそ。習ひ積ずしく争で
かさん適小瓶子直枝の。縦横其ハ左別もなし。二本や三本挿得る
事有迚も。夫ホハ時の偶中にて定規とハなし。又近来皆瓶中
に醜角の具を用る事。此技尊る所より折くハ立花なき習用れ
ハ深きまき形も増ゆ。自然と式法を備。此道全に整と云語曰
欲善其事必先利其器とハ則是ホの義も籠まり。那そ明要

の未調ざる時を於て本意とも云又花瓶用るにつき器物を撰
ぶ係ることも有べきとや夫共の義ハ茶配なきにても能そ。其器に応ず
る係人ハ其物を嘗ることは目前の定理之実なれ微少のことも係ざ
所に至くハ辛尓に浮雑しきりをあらく其義理を味ざるハ孫之ハ
父母の好むを喜て害ある物を薦る類之ぞおるに実意薄く唯
上むき汁を覚へて深く旆き係事ハ皆類想なく家が入用の節に。
自在に出来れざる者之何ごとも切瑳琢磨の上にハ小功をもて大悪を
止まる帰なって省身養意の一助とはなるなれ。知之者不如好之
者好之者不如楽之者と君子の教。擇其善者勤而行之とハ
佛の示言之小大共教に浅る事なし。されど此とも志なくハ人のこ
若楽殿更又有べく一枝を取ハ必己を顧て樹木草茎の曲折を。

我々が意に比べ自恣放志の僻を削れ剛枝風に割れ弱柳雪
に漫も。各身辨の上に推察く。彼に擬へ是になせ。能堪忍ひて
様直さハ。自ら習ひ性となるに迷ふらん。木受縄則直人受諫則
聖也と彼南山の竹ハ岩の傍に生なれども亦夫か上にも括而羽之
鏃而礪之其入事深しと。孔子仲由子説示しまふを察へて挿
花暫時の教とはいへども。學べきなり故有ハ厭へて改め。論るなき餘有
あらバ倦ことを勿れ。然ハ致知格物の初にして終にハ克己の端となり
興させ人物ごと。察一物而貫乎多と聖人の教むかしより改め。能情を教
て。有情と示ハ三教の旨。方便の教生ハ菩薩の濟度。一教
多生ハ佛の慈悲を教しく禮を愛たまふハ。君子の行則仁
の導にして。各懽の指標也。彼淵明。茂叔の人々ぞかハ。専花をま

採ざる均しく。天然の趣を楽しむ。故に庭艸蔓これども。雖次刈ら次
とらや。是れハ熱烈なる隠君子能く所那その義を受て
其身を改めむ。真に其趣を慕ふ。志を行ひ学ぶべきことなり。唯
恐らくハ耳に聞く口に言而己ならんか。世に似て非なる物有。純の苗
に似く。駑馬の中にも。形と嘶と鬪斗の驥騏におづるも有。其嘶と
形の相似たると以。驥と並ひ立て千里を行を勉んとせバ。必彼ら
奴となりて生涯其身を困しめ。永く鞭策に責を受んもらう。
又駑馬ハ駑馬の群に居て。驥の任を貪る事なく。鶏ハ羽翼の限
をなり。蓬蒿の間を天地として。其易きに游ハ。将に鵬鳥の
楽みに均しかるべし。里俗の諺に。轉の真似する鳥ハ水
に溺ると。ならわれ己を欺き寸を以尺に飾る。我輩の邪僻に

くらし。蟹ハ甲に似せて穴を掘り。以管窺天稞覡
によるべし。綆短者不可以汲深とハ君子の金言也。されバ以く
理も亦在れハ能に近し。聖人の教も至れハ可もなく。不可
もなく。歌道の道も一字を鏡に止るにして況や至小の技
ならや。されど天地ハ測りなしれバ。変化極りなく。人工
なることあるまじ。頻益得失ハ首尾無して四時の環
なり。唯若樂冥明ハ名甚需に應ずる者なり

古歌に
ことはとやことのみちハまよひせず 神無月
けふもしられぬまぬも能かそ

○活花通用文字の事

○生活挿 名目義ハ論れ共。皆相通ていけの字に用ゆ。右挿の字。義理通ざれ共生活の字を。俗用すること久し。故に不文の者も覚へよき易し

○花滴花挿へ。昔瓶りの名ハ。瓶の字を用ゆ風し是より風挿と云ふ。嫌へるときハ義也。亦笛押への字も用ゆるも有り

○莟と席上の瓶に插花を入まゐらすると云へし。入まゐるハ納なり亦左は前後へ。枝葉を扱ひ取るを遣と云なり。遣ハ随へ送るの義なり

○別種ハ勿論同種にても交ゆるにをと。添ゆと云也。添ゆるハ益の義也。亦下種持ひ根鎮共云なり

右擬說問對ハ 中祖の旨を受て経傳を則とり鄙言を厭ハず瓶花の意を述め何そ斯 知まてたることを綴ひて損しくも云ふるや於はさんされど知れる青しの兒玉もんことを冀ふ守奈より人名ありしあれハ事てゝ他の縁引を結せ書あるを顕ふすゝ子ふ蔵つてれ淺淵を渡るを云ふ読の字しゝ深くなる人有て千萬ま一も栞とふはるゝあるて先師の本懐ゝ学ゝ幸ひ也事に通さる者あらし と云爾

談

夫博奕之為戯固非君子之事

而孔子以為之猶賢乎已也

蓋為之世無所隠而用心者言之

之耳棋者之初技淺意能也

要棋之所以為棋之難中以

至於明因而益之以志於是乎

悟得其意淺秘無窮其情境

要妙而得其所以然之蕃

弈哉余嘗一日少々之樂至

秉燭先生論以此技為之當

世之法式圖大成其數以觀

註釈之為圖解而學者以識

之旨又作為書以便初學者之

之法ニ圖ヲ寛我思ヲ筆畫
之心ヲ察して似様ニ母ノ面目ヲ
其子ノ妙ナルヲ似様ニ親之
圖其ヲ學しめ耳ハ筆ヲ通シ
ニ後ル可聖賢ノ事ニ志
恒我惟然而上書ニ可書情
安静ニ修我自見書問於
如之先之意ニ以正讀筆
古今人書抄筆之事

寛政十一年己未春三月

八人從北峯窩秋月謹書

青山御流活花手引種

桂月園泰雅著

畫工　百川子興

彫工　野代柳湖

灌華堂藏板

寛政十二庚申載春三月發行

京都三条通升屋町　出雲寺文次郎

大阪心齋橋飾屋町　敦賀屋九兵衛

尾州名古屋本町一丁目　風月孫助

江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛

同　本銀町二丁目　須原屋善五郎

同　日本橋通三丁目　前川六左衛門

同　山下御門通山下町　大和屋久兵衛

書林